

大人計画公演 猿ヲ放ツ

1991年1月30日〜2月4日 駅前劇場

キャスト

アヤメ……………池田祥子
小松……………片葉みはる
土熊蛾一／鼻止刑事……………温水洋一
雑上慎吾……………戸村由香
毒島刑事……………立石明石
寒月刑事／ガルシア……………青島正博
生馬餐部／メフィスト……………松尾スズキ
口田顔人……………藤井晴彦
小曲行之助／ブニユエル……………山崎一(バラノイア百貨店)
小曲ミツコ……………田中章子(バラノイア百貨店)
小曲ミヤコ……………伊勢志津
ゴンザレス……………鈴木隆信(メノジ百科)

スタッフ

作・演出……………松尾スズキ
舞台監督……………南雅之
照明……………佐藤啓
音響・音楽……………半田充
宣伝美術……………北島由香
スライド……………池野佳子
制作……………出口容子

あとがき

当時、『ツイン・ビークス』の噂が耳によく届いていて、すごいのがあった。で、デビッド・リンチも好きだったし、まだ日本に入ってくる前だから、それなら先によっちゃおうと。『ツイン・ビークス』を見ないで『ツイン・ビークス』のパロディをやってやるうっていいので、こんな話を作りました。二丘町っていうところ——これがいわゆる、ツイン・ビークスですよ——そこで、少女の殺人事件が起きる。で、それを解決しようとするんだけど、脇道に脇道にそれていくっていうね。これは本当、ナンセンスだね。深みのある人物が出てこないし、みんな何も考えてないっていうキャラクターだから。

でも、唯一『ツイン・ビークス』と同じだったのは、殺人事件が解決されないことくらいかな。途中で終わっちゃおう。そこが、先取りしましたね(笑)。

ちょっとインナーリップっていうか、自分が小さくなって精子の中に入っていくって話。しかも、実際宇宙に飛んでいく話だし、場面が固定されるのを嫌っていたような気がする。芝居の動きって、横スクロールじゃないですか。移動が左右でしかなくて上下がないから、なんか上下に動いていうイメージを入れたかったですよね。それで、宇宙に飛んだりとか、体内に入っていくとか、高層ビルを登って高層ビルから落ちるとか、そういうシークエンスを入れて、だから物語性っていうよりも、これはイメージを大切にして作ったものですね。

漠然とですが、毎回大切にしているものはありますね。それを完璧に決めてもしばられてつまんなくなっちゃうから、イメージを固定しない。だから方法のための演劇になることを恐れているんですよね。その方法を実現するための演劇。まあ、一般的によくありますけど、それでおもしろかった試しがないですから。

あと、この頃特に六十年代とか五十年代とか七十年代の服装がやけにおもしろくて、よく古着屋まわった時期があって、僕もその頃初めておみあげを伸ばしたのかな。そういうファッション性といっしょくたにして何か作ってやるうっていう魂胆がありましたね。だから衣装はみんな古着屋へ行つて、あれ着なよ、これ履きなよって。

その頃今でいうキューティー少女の始まりみたいな、今よりもっとキテレツな子たちも古着を着ていて、まあ、キューティーに言えば、古着を着つつ洗練させていこうってことなんだろうけど、僕らはまずそれはやめよう、ダサければダサイほどいいっていう風なことやってたんですけどね。でも結局、舞台の役者と客席の客の着てるものがちょうど一緒でしたね、この時期。(2000年3月・談)